

Autumn みほとつたよ!

岳南電車 「日本夜景遺産」に認定

岳南電車が、一般社団法人「夜景観光コンベンション・ビューロー」が制定した「日本夜景遺産」に認定された。

夜景遺産の認定はまちおこしを目的に、隠れた夜景の名所を発掘するために始まったもので、今回で10回目。地元推薦などで集まった全国120カ所の候補の中から15カ所が認定された。

岳南電車を夜景遺産に推薦したのは、富士市内で体験型プログラムを通してまちおこしを推進する一般社団法人「フジバク」。

4年前から岳南電車の夜景ツアーを開催し、夜の間に浮かぶ電車やほのぼのとした灯りの駅舎、車窓から見る夜の沿線風景を「鉄道夜景」としてPRしてきた。レトロな雰囲気が残る岳南電車の夜景そのものが評価されて、全国初の、鉄道全体での認定が決定した。

岳南電車とフジバクは今後、共同で夜景遺産を活用した観光プログラム「夜景観光」を開発、実施していく。



1 富士山の裾野に灯りがともった吉原駅跨線橋が浮かぶ。2 昭和半ばの風情が残る須津駅ホーム。3 沿線の製紙工場も照明に浮かび上がる。

富士急行 成田エクスプレスが河口湖へ直通運転

JR東日本と富士急行は、成田空港発着の特急「成田エクスプレス」の富士急行線河口湖駅への直通運転を、この夏、初めて実施した。当初予定の9月末までの運行から11月30日まで期間延長する。予想を上回る乗客実績があり、7月単月の訪日外国人客数が過去最高の127万人を記録（日本政府観光局発表）したが、成田エクスプレス（大月駅－河口湖駅間）においても外国人観光客が乗客の約30%を占めている。今回の期間延長で、訪日外国人の富士山エリアへの好アクセスを継続、地域の観光振興に貢献する方針だ。

また、都心や多摩エリアからの利用客にとっても、この直通列車は利便性が高い。秋の富士山・富士五湖エリアの観光には、乗り換えなしの成田エクスプレスの人気が高まりそうだ。



富士急行線を走るJR東日本「成田エクスプレス」。

津軽鉄道 立佞武多の「線路上運行」

五所川原立佞武多祭りが終わった翌日の8月9日、津軽鉄道は、3回目となる「線路上運行」を開催した。

これは、津軽半島観光アテンダント制作の「太宰治立佞武多(通称おさむちゃん)」を台車に乗せてモーターカーで牽引、立佞武多祭りの締めくくりとして、線路上の立佞武多運行を楽しむ津軽鉄道ならではの地域イベント。終車後の午後9時、お囃子の演奏に見送られて五所川原駅を出発した立佞武多は、途中、大勢

の人が待つ津軽飯詰駅、太宰治の故郷・金木駅、芦野公園駅に停車した後、最終駅の津軽中里駅に到着した。

漆黒の闇の中を煌々と照らしながら走る立佞武多——駅で待つ人あり、沿線でカメラを構える人あり、追いかける人あり。「線路上運行」は、地域一体で楽しむ夏のイベントとして、回を追うごとに大きな盛り上がりを見せている。



1 出発駅の津軽五所川原駅ではお囃子が演奏された。2 アテンダント制作といえども高さ6mもの大きさ。3 芦野公園駅旧駅舎の喫茶「驛舎」のイルミネーション。4 停車駅のホームはどこもあふれんばかりの人。

一畑電車 島根県産木材で改装した「出雲大社号」が運行

一畑電車は、5000系「出雲大社号」の車内を、島根県産の木材を使って改装、7月14日から運行を開始した。

県産木材の需要拡大を目指す「島根県森林整備加速化・林業再生事業費補助金」を受けたもので、改装には、難燃加工を施した

県産のナラ、スギ、ヒノキを使用。座席の背もたれや肘掛け、壁などを木質化し、通路と座席の木製パーテーション、木製テーブルを新設した。県民や観光客に県産材の魅力を伝えるとともに、「木の温もりある車両」をアピールし、利用促進を図っていく方針だ。



1 島根県産木材をふんだんに使った車内。2 ボックス席に付いた大きめの折り畳み式木製テーブル。3 1998年に導入された5000系。